

## 思い返せば我が部で最初の節目となる出来事

5期 井上順孝

いろいろな意味で「ミニカリスマ」的存在であった創始者滝田先輩がごく身近な存在であった5期だが、今思うと、ようやくに育ちつつあった新しい茎が、扱いようでは大きな傷を負いかねない衝撃を受けたことがある。正式な運動部への昇格の途上にあった当時は、部員の確保は大事で、それも順調にいつて、私が主将になった1968年の夏合宿は、長野県の菅平に数十名が参加し、大所帯になっていた。

おそらく少林寺拳法部が正式な部になることをあまり快く思わない武道関係の部があったことは、雰囲気的に察知できた。しかしそれをものもしなかったのは、先輩たちの努力が実り、また後輩たちもそれを継承し、短期間で順調に部員数が増えたことがなにより大きかった。

しかしここに大きな問題がやってきた。1968年といえはまさに大学紛争が全国的に吹き荒れていた時期である。クラブ活動はクラブ活動それぞれの政治的主張は別のものと割り切れないような事態が生じたのである。東大では68年6月に、当時の大河内総長は安田講堂を占拠していた学生たちの排除に機動隊導入を決定した。同月法学部を除く9学部がストライキに入った。

このとき奨学金も止められ、私はたちまち厳しい経済状態になった。それまでは奨学金に加え、家庭教師、そして一年先輩の瀬山さんやすでに故人となられた都築さんらに手ほどきを受けた襖張りのバイトで、やりくりできていた。奨学金がなくなったのは痛手で、同期の松浦君の紹介で田町駅近くにあった印刷屋でのバイトを始めた。勉強からもっとも遠ざかった時期である。

しかしこのバイトのとき毎日のように運転をしたので、それまでのペーパードライバーから、一躍して腕に自信のドライバーになった。これがのちにハワイ調査やカリフォルニア調査のときに役立った。また授業が再開された頃に、それまで考えてもいなかった大学院の進学への気持ちが起こった。何がどうという影響をもたらずのか人生は分からないものである。

本来なら主将として一番力を入れなければならない時期に、大学の状況は悲惨であった。よく知られているように、69年1月には安田講堂に機動隊が突入し占拠学生を逮捕し、この年は入試も中止となった。この間も、七徳堂には通い続けたのであるが、授業がまったく行われなくなったような状況のもとで、クラブ活動への衝撃も生じた。

今の現役学生諸君からすれば嘘のような話と思う人もいるかもしれないが、大学がこのような状況に陥っているのだから、クラブ活動の休止も考えなくてはならないのではないかという意見を持つ部員も出てきたのである。また部員の中にも違うセクトないしグループに属し、それこそ互いに衝突するような場面もあったと聞いた。幸いにして部員同

士が殴り合いになったというようなところまでは至らなかったのだが、なかなか緊迫した日々であった。

68年の秋ころだったと思うのだが、ある日、七徳堂の前に部員たちが集まってもらった。これからのクラブ活動をどうするか、皆で話し合う場をもうけたのである。芝生の上に皆が腰をおろした。重い空気が漂っていた。しかし、私には先輩たちが汗水たらして築き上げた土台をここで崩すことは考えられなかった。

イデオロギーの問題、政治的問題は、個々人の信念に従う。それを同じクラブだからといって統一することはできないし、どれが正しくてどれが間違っているという議論もやれない。

東大少林寺拳法部はそれ自体が一つの連続体である。ここで絶やすわけにはいかない。クラブの中に対立を持ち込まないでくれ、それができない人は退部してくれ。そのようなことを頼んだ記憶がある。出席していた部員は納得してくれた。

安田講堂陥落のあと、学生運動は潮が引くように静かになっていった。あの騒乱はなんであったのかと思うほどであった。69年度の春に開かれた関東大会に、私は乱捕りの個人戦に出場した。思うところがあった。主将というのは孤独を強いられるときがある。周りの支持がなければ務まらない役目であるが、どんなに周りに不満があっても、それを口に出してはおしまいである。自分が至らないのだと言いつけさせるしかない。

最も少ないときは出てきたのがたった二人であった七徳堂で、黙々と

続けた練習の成果を自分なりに確かめたいという思いがあった。それで団体戦でなく個人戦を選んだ。その頃は団体戦ではたいい一回戦で敗退するのが常だったからである。

思いもかけず準優勝となった。後輩たちが全日本優勝を続けるようになった後の時期のレベルと比べると、大した戦績でもないが、それまでの三木先輩の個人戦三位が神話のように語られていた時代においては、華やかな結果と言えた。

その後、後輩たちが着実に戦績をあげていくようになっていく。そうになると、あのとときの緊迫した雰囲気は、まるでうたかたの夢であったかのように思えてきた。今同期が集まっても、そんな危機的な時代があったことは忘れたかのようにである。

厳しい秋合宿に耐え兼ね、文字通り夜逃げした同期がいた。夏合宿中に女性の浴室の覗きをやった後輩がいた。数十人とはいえ一つの組織をまとめていこうとすると、いろんな局面に遭遇する。今はすべて懐かしい思い出になるが、それは人間の脳が記憶をいくらか書き変えてしまうことが関係していそうである。

苦しいときはやはり苦しい。多少なりともそうしたことに耐える経験を二十歳前後にできたということは、きつと何がしかの糧になっているのであろう。うまくいこうといくまいと、その記憶が多少歪もうと、実際に体験したことは、どこかに分散して保持されているはずである。

次は6期の藍原さんをお願いします。